

特集

特集／開発途上国における図書館の役割と支援活動

タンザニアの国家統計局図書館の立ち上げ

相原好江

●猛暑と資料との格闘の日々

二〇〇四年二月四日、私は国際協力機構（JICA）の「タンザニア国家統計局データ提供能力強化計画プロジェクト」の一環として、統計図書整備のため、成田を飛び立った。今回のJICA側の支援は、器（図書館スペース）を統計局が用意し、これにかかわるハード、ソフト全体をサポートするというもの。私が任に付いたときの統計局は新図書館の改装中ということで、図書館の資料は本館の中庭にある別棟の一角の八畳間ほどの部屋に仮置きされていた。部屋は壁という壁すべて、天井まで本が積み上げられていて、働くスペースもなく眼を覆いたくなる惨状だった。この本の山を崩し、地域別・国別・主題別に分類し、ラベルを貼り、そして蔵書目録を編み、さらに新図書館にこれらの資料を配架し、一般の皆さんに提供するというところまでが私の仕事だ。

民族衣装に身を包み、ターバンを決して離さないカウンターパート（CP）の狭い部屋に鳴り響く声に迎えられ、私達の地獄の作業が開始された。まずは自分の居場所を作ることだ。私は一日中、立ってはいられない。入り口に山のように積まれた段ボール箱を労務員に一日がかりで他の場所に移動してもらった後、申し訳程度の私の机と椅子が運びこまれた。この机と奥まったところにあるCPの机までの通路が作業場所だ。これだけの空間でこの山と詰まった資料をどうやって崩すというのか。整理作業が始まると、さらに難問が生じた。この本の山の中に統計局がこれまで出版し売れ残った資料の重複本がかなり含まれているとのこと。このスペースのないところに、更に重複本とは！狭い部屋は足の踏み場もない。ハイヒールで作業に入ったCPも三日目にして、はだしとなり、方や初日にゴキブリに飛びつかれて悲鳴を上げていた私も、数日後には逃げ回るゴキブリをスニーカーで小気味良く潰せるほどになったのに、スペースの問題は常に我々を苦しめた。さらに悪いことに、作業中でも統計書の販売は行っていたので、お客さんが来たら、作業を中断して通路を開けなければならぬ。よく言えば、これが我々にとっての休

憩時間でもあった。硬くなった腰を伸ばせるしばしの極楽。

そんなある日、作業服の日本人男性が、のっそり部屋に入ってきた。本の山の中からエプロン姿の髪を振り乱した私が顔を覗かせたときの、その人の驚き、そして照れ笑い。以心伝心、お互いご苦労さま。地球の裏側で私にも増して努力している人がいるのかと思うと、ゴキブリの一匹、二匹、なんだ、なんだ、急に力が湧いてくる。

こうして日々の苦難の山崩し作業の成果もあって、やっと天井を支えていた本の山が崩され、八畳間の天井部分に空間が広がった。その代わり部屋の床一面には地域別の統計書の山が再度作り上げられたものの、なんとか人間並みに呼吸ができる場所を確保し、タンザニア国の統計書の主題分類が終了した頃、私の初回の帰国日が迫ってきた。今回の整備作業については、予備調査と現地作業との間で、統計局側による大きな状況変化があったことが確認されたため、引き続き再度の渡航が予定されていた。私は日々努力してくれたCPに私がタンザニアを不在にする一カ月半の間にしてもら



カウンターパートのベロニカさん（中央）、ジツ女史（左）と
（2004年6月、宮澤隆一撮影）

仕事を課題に残し、夜のダル・エス・サラームを後にした。

●再会と新図書館オープン

あれから一カ月半、自分の家のようになった統計局に戻り、C Pの顔を見たとき、これまでの労苦、そしてこれからへの大きな期待が相まって涙してしまった。ここまですべて来たらには頑張るしかない、さあ、続きをはじめよう、もうゴキブリは退治できたとし、八畳間は空気が浄化されたし、二人の心は膨らんだ。それに統計局を不在にしている間に、本館一階部分の改修工事もほぼ終了していた。ただ電気関係工事が終わっていないので冷房こそ無いが新しい図書館への入館が許された。おお、夢にまで見たスペースだ。南向きのガランとした無機質な部屋は、南国の太陽で蒸し風呂状態であったが、それでもうれしかった。

早速図書館諸機材入手の準備が開始された。共に成田を発ったIT専門家K氏の出番だ。二人して蒸し風呂の中を巻尺で計測し、そして書架・閲覧机・カウンター机・書籍棚発注のために家具工場めぐりがスタート。JICAの方針で支援機材は現地調達が目とされたので、適切な家具屋さん探しはスワヒリ語堪能なK氏に頼るしかない。感謝である。諸機材が発注に出されている間、新スペースは重複本の整理に利用と目論んだ、が、ことは簡単ではない。別棟にある八畳間からここまで本を運ぶには、庭

を經由しなければならぬ。暑さのあまり庭でのびきっている用務員たちにチップをはずんでお願いすることにした。彼らの体からあふれる汗もすごかったが、その後の蒸し風呂内での私の作業はさらに地獄。部屋の中には二〇分といられなかった。C Pは本の販売があるので、八畳間を空けられなかった。結局、私の一人作業。チップの効かない作業も世の中にあることをたっぷり知った数週間だった。

それから一カ月ほどして発注されていた書架が納品された。心配していた出来上がりもまあまあそう、何とか現地調達でいけそうな感じだ。さあ、器が納品されたら、最後は分類された統計書の八畳間からの大移動だ！ 今度こそは、局内で手のある人すべてが助っ人になり出された。さすがアフリカ、いつもお茶の世話に当たるおぼさんが、本を頭に載せて運んできてくれたときは、ウルウルした。八畳間からすべての資料が新図書館に運ばれてきてしまえば、仕事は七割終わったようなもの。運び込まれた資料が書架に並べられると、あの八畳間で天井まで積まれゴキブリの餌と化していた資料が、一国の歴史を物語るかのような貴重な資料の気品を持って、まるで別物の顔を覗かせた。感無量だ。

しかし感慨に浸っている間もなく、最後の作業となる蔵書目録の作成に取りかかった。この頃になると、統計局も我々の作業に理解を示してくれて、図書館のみ冷房の

運転OKと状況は改善。エクセルで作る目録作りはかなりの集中力が要求されるが、たまたまこの時期にC Pが統計局の集計作業で一週間の地方出張となったので、私は図書館にこもり、作業に没頭した。パソコンと書架の往復運動も、冷房の利いた静かな陽だまりの中では心地よかった。誰もいない、広々とした空間に響くキーの音、この一週間は自分の居場所を忘れさせるほどだった。この後は、続々と業者からの発注機材も届き、新図書館オープンに向けての図書館内の体制が整った。

そしてついにこぎつけたオープンの日には統計局の方がたがさくらとなり、私たちに祝い勇気付けてくれた。さらに、オープン数日後には、十数人の高校生がオープンを祝うがごとく閲覧に訪れ、陽当たりの良い窓際の閲覧机に勢ぞろいしたときは、胸が一杯になった。この中の一人でも、将来統計局の職員となり、統計書を日常の糧にしてくれることを祈らずにはいられなかった。

こうして喜びのうちに、ゴキブリと汗との戦いのJICAの支援作業は終了した。関係者の思い出のつまったこの図書館が、末永く国民の利用に供され向上することを願いつつ、私は再度ダル・エス・サラームを後にした。

（あいはら よしえ／元アジア経済研究所職員）